

平成二十七年 度 入 学 試 験 問 題

国 語

(第一回)

注 意

- 一、問題冊子と解答用紙が配られたら、まず**解答用紙の決められたところに座席番号、受験番号、氏名**を書いてください。
- 二、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 三、試験開始の合図があつたら、問題冊子のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、この問題冊子は、**十五ページ**あります。ページの不足や乱れがあつたら、だまつて手をあげてください。
- 五、印刷のはっきりしていないところがあつたら、だまつて手をあげてください。
- 六、試験終了の合図があつたら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。
(問題冊子は持ち帰ってかまいません。)
- 八、国語の試験時間は**五十分間**です。(九時四十分を終了予定です。)

一

傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① チームの攻撃を司る存在。
- ② 悪の権化のような人。
- ③ 重宝する道具。
- ④ 定石にのっとる。
- ⑤ 郷に入っては郷に従え。
- ⑥ 口はワザワいのもと。
- ⑦ 期日をノばしてもらう。
- ⑧ 食品エイセイに気をつける。
- ⑨ 同じドヒヨウで戦う。
- ⑩ 受験勉強にセンネンする。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。)

商売の歴史を見ても、「無料」という言葉が頻繁ひんぱんに使われるようになるのは現代になってからです。それ以前は、①いろいろと新しい販売方法を考案しても、無料という言葉は使われませんでした。

その良い例が、日本で、江戸時代の17世紀に始まった「富山の葉売り」です。

「富山の葉売り」と聞いてすぐにイメージできる日本人は、もう、あまりいないかもしれません。

富山藩でつくられた薬を行商人が全国各地を訪れて販売するようになったのは元禄時代。薬を入れた柳※1行李べうりを背負い、全国津々浦々、一軒一軒訪ね歩いて薬を売ります。見も知らぬ他国※2の者が突然訪ねてきて薬を買ってくれと言われても、信用できなくて当たり前。地方の農民や漁師たちが、「X」お金を出してくれるはずもない。そこで思いついたのが、「配置薬商法」です。

その家に薬の入った箱を置いておく。

A

、次に戻ってくる半年とか1年の間に使った薬があれば、その料金だけをそのときに徴収する。この方式であれば、疑い深い地方の人たちも安心して薬箱を置いていくことに同意してくれる。

いまなら、この販売システムを「無料試用」と呼ぶことでしょう。

「365日間無料試用！」です。

でも、当時は、無料という言葉を使いません。行商人としては自分の所有物である薬を365日間預けるのです。あなたを信頼してお預けしますと宣言しているわけです。

贈与ぞうよにおいては、売買取引と違い、贈られたモノは贈り手から譲渡じやうとされたわけではない。

B

贈り手はモノを一時的に貸しただけ。受け手はモノを一時的に借りているだけだと解釈されます。

薬箱を預けるということは一時的に貸すことと同じです。薬箱を置いておかれる側とすれば、これは、

他人の所有物を365日間預かる、C、365日間借りることと同じです。自分を信頼して薬箱を一時的に貸してくれたのです。したがって、それを、最初の形できちんと返さなければいけない義務を感じます。

この義務感、贈りものを受けとった者が、贈り手にお返しをしなくてはいけないと感じる義務感と同じです。一種の負い目感情です。なんとなく落ち着かない気分です。そういった感情は、次に行商人がやってきたときに、使った薬のぶんだけお金を支払うことですっきりとします。

富山の薬売りの「配置薬商法」は、モノのやりとりを売買ではなく、なるべく贈与交換に近い形にとどめることで成功しました。

まず最初に、贈りものである薬箱を預かることで、行商人と受取人の間にある程度の信頼関係が生まれます。そして、また、受取人はなんらかのお返しをしなければいけないという負い目感情を抱くようになります。よって、腹痛とか頭痛とかになれば、たとえ薬があつたとしても、富山の薬売りが置いていった箱に入った薬を飲む。そして、半年後とか1年後に、代金を払うときには、②お返しができたというある種の安堵感を体験するのです。

富山の薬売りは、いまで言う「無料ギフト」も始めました。紙風船とか浮世絵風の版画、手ぬぐい、扇子など、訪問先の家族が喜びそうな品を手渡しました。D「無料ギフト」なんて言葉は使いません。「進物」とか「おみやげ」と呼んでいました。「この風船は、お坊ちゃんへのおみやげです」とか「これは旦那様へのご進物です」と言って版画を手渡す。

③おみやげとかご進物という言葉を使うことで、商品である薬が、贈りものとしてみなされる傾向をさらに促す結果になります。

商売上の売買取引を、贈与交換の形式に変えることで、売り手と買い手がギフトの贈り人と受取人にな

り、ある種の絆が結ばれるようになるのです。

(中略)

1850年のミルウォーキーの酒場の広告には、「お酒ならなんでもそろってます」という見出しのあとに、「注目…毎日11時より無料ランチ提供」と書かれていました。とはいっても、ビールとかお酒を1杯注文すれば食べ物無料ということでした。結局は、ビール1杯ですむはずもない。きっともつと飲むだろうと酒場の主人は計算します。そのうえ、のどが渇くようにわざと塩辛い味つけにした食べ物を出して、ビールを数杯飲ませるというトリックです。

この商法は、まさに、いまの携帯ゲームや携帯電話販売に見られる商法と④発想は同じです。

食べる物を無料で提供するの、最初は、酒場の主人の心意気から始まりました。よく酒を飲みに来てくれる上得意客が、たまたま、食事時にやってきた。主人は日ごろのご愛顧に感謝して、ハムやチーズ、クラッカーを皿に盛って出した。酒場の主人からの返礼です。そして、そのまた、お返しとして、客はいつもよりたくさんのビールを飲んだり、あるいは、リピート客として戻ってきてくれる。

こうして、贈与交換の関係が続くのです。

でも、無料とつけたところで、贈与関係は売買取引に変わってしまいました。売買取引になってしまうと、いつでも関係を打ち切ることができます。継続性はなくなります。

ですから、ビジネスの歴史において、無料という言葉は、長い間、使われなかったのです。アメリカでもフリーランチという言葉が広告に登場するようになったのは19世紀半ば。日本でも、商売では無料という言葉は極力避けました。富山の薬売りは「無料」という言葉を使わずに「次におじゃまするまでお預けする」とか「おみやげ」「ご進物」という言葉を使いました。

有料と無料との区切りをあいまいなままにしておくことは、売買取引と贈与交換との区切りを明確につ

けないことによつて、売り手と買い手との間にある心のつながり（絆）を切らない方法でもありました。商売にたずさわる者が意識的にしたのか無意識的にしたのかはわかりません。ほとんどの場合、社会の雰囲気、無料という言葉を使うのを「Y」のでしょう。

⑤日本には「おまけ」という良い言葉もあります。

おまけは大阪発祥の言葉です。

1927年、江崎グリコがお菓子に小さなおもちゃを入れて販売を始めました。それが「グリコのおまけ」と言われるようになりました。『おまけ』の博物誌によると、大正初年ごろの大阪では、縁日えんじちで「トコトンアメ」というのが売られていて、その口上は「もうひとつオマケ、トコトンアメ」という決まり文句だったそうです。つまり、たとえば10個10銭のところを、1個おまけして11個10銭で売るという商売です。おまけを漢字で書くと「御負」。売り手である商人のほうを負う。費用を負担するという意味からきているのでしょうか？そうではなくて、贈与の法則にある、もらった側の負い目感情の「負う」だと想像してみたいです。オマケをもらった側がオマケをくれた側に一種の負い目を感じ、また、買ってくれる。言葉の使い方にも、商売人の心理作戦が感じられて楽しくなります。

（ルディー和子『ソクラテスはネットの無料に抗議する』）

（問題作成の都合上、表記を改めたところがあります。）

※1 柳行李……………柳を編んで作った旅行用の荷物入れ

※2 他国の者……………ここでは日本国内の他の地域に住む人のことをさす

※3 ミルウォーキー…アメリカの都市

問一 空欄

A

D

にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

記号はそれぞれ一度しか選べません。

ア そして

イ ところが

ウ したがって

エ つまり

オ むろん

問二 空欄

X

Y

にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

【X】

ア おずおずと

イ やすやすと

ウ きつぱりと

エ おいそれと

【Y】

ア うながした

イ あきらめさせた

ウ ためらわせた

エ さげすませた

問三 傍線部①「いろいろと新しい販売方法を考案しても、無料という言葉は使われませんでした」とあり

ますが、商売をする人たちの間で「無料」という言葉が好まれなかったのはなぜですか。次の文の空欄

I

III

にあてはまる語句を本文中からそれぞれ探して答えなさい（I、IIは漢字四字、IIIは漢字三字とします。）

「無料」という言葉を使ってしまうと、商人と顧客は I（漢字四字）ではなく II（漢字四字）をし

ていることになり、そうすると、両者の関係の III（漢字三字）が切れてしまうかもしれないから。

問四 傍線部②「お返しができた」の意味に最も近いものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 恩に報いた
- イ 責任を果たした
- ウ 借りを払った
- エ 対価を払った

問五 傍線部③「おみやげとかご進物という言葉」とありますが、「おみやげ」の「お」と「ご進物」の「ご」は、どちらも漢字で書くと「御」となります。次の「御」のつく言葉のうち、①「お」と読むものと②「ご」と読むものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 御愛想を言う。
- イ 御無事を祈る。
- ウ 御者に馬を引かせる。
- エ この金額で済むなら御の字だ。

問六 傍線部④「発想は同じです」とは、どのような「発想」のことですか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 最初は料金をとらず、後でまとめて料金を請求しようという発想。
- イ 無料と銘打ち、客が増えたところで有料に切り換えようという発想。
- ウ 無料で商品を提供し、あわせて別の有料の商品を購入させようという発想。
- エ 常連客にだけ無料とすることで、長い付き合いのできる客を増やそうという発想。

問七 傍線部⑤「日本には『おまけ』という良い言葉もあります」とありますが、筆者が「おまけ」を良い言葉だと考えるのはなぜですか。五十字以内で述べなさい。

問八 本文の内容に一致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 富山の薬売りの「配置薬商法」は、使ったぶんだけ払えばよいという合理性が画期的であった。
- イ 富山の薬売りは客を信頼して商品を預けたため、客たちはかえって自主的に代金を支払うようになった。

ウ おみやげとは、心のつながりを感じている者同士が、それを確かめるために相手の喜ぶものを贈与することである。

エ ミルウォーキーの酒場では、時が経つにつれて、主人と常連客の心のつながりが薄れていった。

【三】次の文章は、明治時代に俳句を再興させた正岡子規を主人公にした小説の一節である。本文中に登場する虚子、碧梧桐、瓢亭などの人物は、子規の俳句の弟子たちである。本文を読み、後の問いに答えなさい。（字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。）

子規は朝の九時から虚子を待った。すぐ来るものと思っていたが十一時に虚子はあらわれた。二人は早い昼食を摂った。食事の後、子規は虚子を散策に誘った。子規はあらかじめ虚子を連れていく場所を決めていた。大切な話だから、それなりの場所がいいと思った。子規が打ち明けた後、それを承諾してくれた虚子と二人で眺める風景は広々と視界が開けた所がいいと思った。

道灌山を選んだ。子規の足でも四十分程度歩けば行ける。山と呼称はあるがせいぜい二十メートルの高さである。江戸城を建築した太田道灌がこの地から、武蔵野が一望のもとに見渡せるのを気に入ったことで「道灌山」という説もあった。江戸時代には月を眺める名所と、虫の鳴き声を聞く「虫聴き」で有名であり、江戸の庶民が（a）こぞつて秋にはここに登ったといわれる場所だ。

二人は家を出て、鉄道線路を渡り、御隠殿坂を登り、坂上の谷中の墓地に出た。谷中墓地は広大な敷地を持つ。墓所を通り抜け、寺町通りから山にむかう。坂上の道を歩き続けた。この坂上は正確には上野の台地から続いているものである。上野の山が海側の突端で、二人が歩いているのは北の方角、つまり山への道程で、次第に道幅は狭くなりその最後が①道灌山だった。

やがて前方に茶店が見えた。

子規はその店の長椅子に腰を下ろし、杖をたてかけ、店の者に言った。

「お菓子をおくれ」

のちに虚子がこの時を振り返って言うには、逢った時から子規は不機嫌だったらしい。虚子は、この突

然の呼び出しと、二人だけの散策が意味するものが何であるかをあらかじめわかっていた節があった。

茶店の老婆が大豆を餡と一緒に煮て固めたような菓子とお茶を運んできた。

子規は虚子にむかって、

「おたべや」

と言って、そうして自分もひとつ口に入れた。それから少し間を置いて言った。

「どうぞな、これから先少し学問ができるんかな」

虚子は子規の言葉の意味がわかっていたのか、遊びをやめて懸命に学問し、子規がやろうとしている②俳句の仕事を自分が亡き後にこれを継いでやってくれる意志はあるのかと聞いていると察した。

虚子は黙ったままだった。子規も返答を待っていた。長い沈黙の後、虚子は言った。

「③あしは学問をする気はありません」

子規は虚子の言葉をはっきりと聞き、戸惑うような視線で（b）くれない武蔵野を見た。そうしてようやく口を開いた。

「それではお前とあしとは目的が違う。今まであしは自分のようになって欲しいとお前の素行を責めたが、あしの誤りであった。あしはお前を自分の後継者として強いることは今日を限りにやめる。④これからあしは自らそれを許していたお前に対する忠告の権利も義務もなくなった……」

子規の目は夕陽を見たままだった。

子規の落ち着いた声に虚子は応えて言った。

「ノボさんの好意に背くことは辛いことじゃけど自分の性行をかえることはできません。ノボさんのこれまでの忠告を実行できなかったのも、これは自分の性行で、勇気ありません」

虚子の言葉に子規は何も応えようとしなかった。

会話はそれ以上すすまなかった。

やがて子規はかたわらの杖を手に取り、それに寄りかかるようにして立ち上がった。

虚子の目には子規の落胆と、それ以上にその身体を疲れが襲っているように映った。

二人はやってきた道をそのまま黙って歩いた。谷中の墓地を抜け、御隠殿坂を下り、その踏切の先で二人は別れた。

虚子は子規と別れた後、上野の山を彷徨^{※3 ほうこう}するかのよう^{※4 さまよう}に歩き続けた。⑤子規にとつて虚子が後継者の要請を断わったことは、その半生において驚愕すべき出来事であった。

子規は家に戻っても気持ちの整理がつかなかった。気持ちを整理するために広島にいる五百木飄亭^{いおきひょうてい}に長い手紙を書いた。

虚子は私の後継者ではなかった。私は虚子の指導者でもない。私の文学はすでに終わりが近づいている。ふり返ってみれば虚子はこれまで何度も私を捨てようとした。私は一度も虚子を見捨てなかった。⑥親が子を愛し、忠告をする。しかし子は親のことより伶俐^{れいり}（計算）なものだ。これも親の愚痴^{ぐち}だ——忠告を受け入れなくとも文学者になることもある。私は虚子を絶交などしない。普通の友として付き合うが、忠告をしたりは二度としない。

子規の落胆がよくあらわれている書簡である。

この文のあとに俳句を入れ、次の文章で終っている。

非風^{ひふう}が去って、碧梧桐^{へきごとう}が去り、虚子も去って行った。私とともに心から話ができるのはあなたただだけだ。

しかし私は孤立すると同時にいよいよ自立心が強くなった。死はますます近づいている。私の文学はようやく佳境に入った。

飄亭はこの書簡を読み、すぐに返信を送った。

今、急に虚子と絶縁などほしないで欲しい。暮れに自分が上京し、虚子と話し合いをするから、と。し

かし⑦この孤立は、この先の子規の「俳諧大要」^{※4}の完成、文学への見方、捉え方^{とらえ}に少なからず好影響^よを与えた。

子規は切実に「孤」にともなう哀切を知ったと言える。同時に自分が進むべき道程に対して、自らが率先して挑む以外に道はないことを確認することにもなった。

（伊集院静『ノボさん』）

※1 あし……………わたし

※2 ノボさん……………子規の呼び名。子規の本名はのぼる。

※3 彷徨する……………さまよう

※4 「俳諧大要」……………子規の著作。俳句理論がまとめられている。

問一 二重傍線部(a)「こぞつて」(b)「くれなずむ」の意味として適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(a)「こぞつて」

ア 我先にと急いで

イ 人に気づかれずに

ウ みなで誘いあつて

エ ひとり残らず

(b)「くれなずむ」

ア 夕日のきれいな

イ もう暗くなった

ウ なかなか日が落ちない

エ ところどころがかすんだ

問二 傍線部①「道灌山」について述べたものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 北側に上野や谷中墓地を眺めることができる。

イ 江戸時代から月見の名所として知られている。

ウ 登ると体が疲労するくらいの急な坂道がある。

エ 太田道灌が造成したところから名前がついた。

問三 傍線部②「俳句」について、次のA～Hの俳句を季節によって分けたものとして正しいものを次のA～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A さまざまのこと思い出す桜かな 芭蕉ばしょう

B いくたびも雪の深さを尋ねけり 子規

C 柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺 子規

D 菊の香やならには古き仏達 芭蕉

E 赤い椿つばき白い椿と落ちにけり 碧梧桐

F 五月雨さみだれや大河の前に家二軒 蕪村ふそん

G 流れゆく大根の葉の早さかな 虚子

H 向日葵ひまわりの空かがやけり波の群 秋桜子しゅうおうし

ア 春—A・F 夏—G・H 秋—C・D 冬—B・E

イ 春—A・E 夏—F・H 秋—C・D 冬—B・G

ウ 春—A・G 夏—F・H 秋—C・E 冬—B・D

エ 春—A・F 夏—D・H 秋—C・G 冬—B・E

問四 傍線部③「あしは学問をする気はありません」と言っているときの虚子の気持ちとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子規に忠告されるのはもう嫌だという気持ち。

イ 自分が学問に向いていないことを認める気持ち。

ウ 学問をすることの責任の重さに戸惑っている気持ち。

エ 心にもないことを言つて、子規を試そうとする気持ち。

問五 傍線部④「これからあしは自らそれを許していたお前に対する忠告の権利も義務もなくなった」とありますが、子規はこれから虚子とどのように関わろうと考えていますか。それが分かる箇所を探し、十一字で抜き出さない。

問六 傍線部⑤「子規にとって虚子が後継者の要請を断わったことは、その半生において驚愕すべき出来事であった」とありますが、虚子が断わるはずがないと子規が予想していたことが分かる一文を探し、最初の五字を書き抜きなさい。

問七 傍線部⑥「親が子を愛し、忠告をする。しかし子は親のことより伶俐（計算）なものだ。これも親の愚痴だ」とは、子規のどのような思いを述べたものですか。七十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑦「この孤立は、この先の子規の『俳諧大要』の完成、文学への見方、捉え方に少なからず好い影響を与えた」とありますが、孤立したことによって子規はどう変わりましたか。二点に分けて簡潔に述べなさい。

問題は以上です。

平成二十七年 度 国語 第一回 解答用紙 ※印の欄には、何も記入しないでください。

座席番号	受験番号	氏 名

一	
① る	②
③ ③	④ ④
⑤ ⑤	⑥ い
⑦ ばし	⑧ ⑧
⑨ ⑨	⑩ ⑩

※

二	
問一 A	B
C	D
問二 X	Y
問三 I	II
III	
問四 ①	②
問五 ①	②
問六	
問七	
問八	

※

三	
問一 a	b
問二	問三
問四	
問五	
問六	
問七	
問八	

※